

An observational study of oral functions in the patients aged from 20 to 49 years

吉岡, 和彦

<https://hdl.handle.net/2324/7329442>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (歯学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



氏 名	吉岡 和彦			
論 文 名	An observational study of oral functions in the patients aged from 20 to 49 years (20 歳から 49 歳までの患者を対象とした口腔機能の観察研究)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	築山 能大
	副 査	九州大学	教授	高橋 一郎
	副 査	九州大学	教授	和田 尚久

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

「口腔機能低下症」の概念が提唱されて以来、高齢者の口腔機能に関する研究は多数報告されている。また、「口腔機能発達不全症」という概念により、乳幼児期、学齢期の口腔機能への関心も高くなっている。しかし、その間の年齢層である成人期の口腔機能についての研究報告は少なく、その実態は不明である。本研究では、この年代の口腔機能に注目し、20 歳から 49 歳の患者の口腔機能を解析し、その実態を後ろ向きに検証することを目的とした。対象者は福岡市の歯科医院に来院した 20 歳から 49 歳までの患者で、Eichner A の歯列を有し、3 つの口腔機能、最大咬合力 (MOF)、最大舌圧 (MTP)、咀嚼能力 (MF) の計測データを取得している者とした。口腔機能低下症の診断のための基準値 (MOF : 500N、MTP : 30.0kPa、MF : 100.0mg/dL) 未満の患者数を算出し、2 つ以上の機能で低値を認める患者のプロファイル (年齢、性別、主訴、歯科治療歴) を抽出した。また、性別、年齢 (20-29 歳、30-39 歳、40-49 歳の 3 群間) で口腔機能を比較した。各群のデータの表記は、中央値と四分位範囲 (IQR) で行い、統計解析には、JMP17.0.0 を用い、有意水準は 5% とした。

診療録 (カルテ) 調査の結果、183 名 (男性 50 名、女性 133 名、年齢中央値 : 33 歳、IQR : 28-41 歳) の患者が対象者として登録された。口腔機能の中央値は MOF : 1066.6N、MTP : 37.9kPa、MF : 250.0mg/dL と高値を示したが、各口腔機能で基準値より低値の対象者 (MOF : 19 名、MTP : 30 名、MF : 3 名) を確認した。また、2 つの口腔機能で低値を認めた対象者は、合計で 9 名確認され、すべて女性であった。性別で口腔機能を比較したところ、3 つの口腔機能すべてにおいて男性が有意に高い値を示した。また、各年齢群の比較では、すべての口腔機能において有意差を認めなかった。2 つ以上の口腔機能で低値を認めた対象者では矯正治療歴がある、あるいは矯正治療を検討している患者が 9 名中 8 名であった。過去の報告では、口腔機能の未発達が歯列不正や不正咬合と関連している可能性を示しており、矯正治療前後での口腔機能の評価および必要に応じて口腔機能改善のためのオーラルリハビリテーションを実施する必要性が考えられた。これらの結果より本研究で調査した年齢層で Eichner A の歯列を有する者では、全体として口腔機能計測値は高い値を示したものの、MTP、MOF において低値を示す者が一定数存在すること、女性の方が低値を示す可能性があること、口腔機能が低値の者では歯列不正や不正咬合と関連があることが示唆された。

以上の結果から、成人期における口腔機能低下の存在および口腔機能改善の必要性が示され、近年注目されている歯科医療介入による健康増進の概念に合致する新規の知見が示された。よって博士 (歯学) の学位授与に値する。